

コーディネーターを支えるミドルリーダーの役割 —工業高校におけるスクールソーシャルワーカーを活かした実践—

阿津坂 理沙¹

家近 早苗²

¹ (大阪市立泉尾工業高等学校)

² (大阪教育大学大学院連合教職実践研究科)

【問題】

現在日本の高等学校において、工業高等学校(以下、工業高校と略記)など専門学科系の高校は、普通科系の高校よりも中途退学率が高い状況がある(文科省, 2020)。このような状況に対応するために、学校心理学(石隈, 1999)で示されている校内の援助資源をつなげた適切な援助サービスを行う必要があると考えられる。

そのためミドルリーダーには、学校にある人的資源や物的資源、組織的援助資源を発見し、教師と専門スタッフの人的資源をつなぎ、協働を生み出すことが求められる。

第一発表者の立場は、特別支援教育チームのメンバー、進路指導主事であり、第二発表者は会議進行へのアドバイスをする。なお本研究の発表にあたっては校長の許可を得ている。

【目的】

スクールソーシャルワーカー(以下、SSW)と教師が共に行うチーム援助におけるコーディネーターおよびミドルリーダーの役割を検討する。

【方法】

期間: 2020年4月～2020年7月

対象: A工業高校のコーディネーター(以下、Coとする)の教師3名、SSW, 第一発表者。A工業高校で開催した第1回から第6回のコーディネーター会議(以下、Co会議とする)。

分析の方法: Coの教師3名、SSW, 発表者の5名でCo会議を開催し、その内容を記述する。記述した内容からCoとミドルリーダーの役割を明確にするとともに、生徒に対する具体的な実践について検討する。

【結果】

週に1回Coの教師3名とSSWと発表者が参加する新たなCo会議を6回開催した。6回のCo会議の内容について検討した結果、Coの教師3名の役割は、①Co会議の司会、②学級担任との連携、③管理職との調整、④学級担任、Co, SSW, 司法機関とのケース会議の開催、⑤人権委員会のメンバーとして生徒や学級担任との面談の実施、⑥生徒の希望の聞き取りの6点であった。また校内で特に援助が必要と考えられる2名の援助(以下、事例1, 2とする)をミドルリーダー(発表者)、SSW, Coの教師3名とともに開始した。

【事例1】家庭環境に課題がある生徒への援助

SSWは司法機関や民生委員と連携をとり、Coの教師は学級担任とともに生徒への面談を行うなど学級担任への支援を行なった。発表者は生徒へ授業の中で丁寧に学習を支援する直接的な援助を行なった。また発表者はSSWからの生徒への支援に関する報告と相談を受けた。

【事例2】日本語指導が必要な生徒への援助

日本語指導が必要な生徒に対してミドルリーダーとして発表者が管理職や人権委員会に働きかけて、授業におけるiPadの翻訳機能を活用した学習支援や、他の教科の教師との調整を行なった。またCoの教師に学級担任との面談や生徒の希望の聞き取りなどを依頼した。

第一発表者の、三次的援助サービスが必要な生徒への援助における、会議進行においてのミドルリーダーとしての役割は、①TTの授業での丁寧な学習支援、②SSWからの報告と相談、③iPadの翻訳機能を利用した学習支援、④管理職への提案、⑤人権委員会での検討をCoへ依頼、⑥他教科との調整の6点であった(表1)。

表1 生徒への援助の事例の内容とミドルリーダーの役割

	ミドルリーダーの役割	内容
事前の準備	会議の立ち上げ	校内でSSWが活動しやすくするために、SSWとコーディネーターの教師3名に参加を要請し、週に1回会議を立ち上げた。
事例1 家庭環境に課題がある生徒とその学級担任への援助	・チームティーチングの授業の中での丁寧な学習支援 ・SSWからの報告と相談	・できそうな問題から説明していくと生徒は前向きに学習に取り組むようになってきた。また不足している文具などを生徒に貸し出した。 ・SSWより生徒に行なった面談の内容や援助について報告を受けた。また援助の進め方や、学級担任や管理職との連携方法について相談を受けた。
事例2 日本語指導が必要な生徒への援助	・英語の授業でのiPadの翻訳機能を利用した学習支援 ・管理職への提案 ・人権委員会での検討をコーディネーターへ依頼 ・生徒が希望する他教科における使用の調整	担当する教科の授業で生徒がワークシートに記入することに苦戦している様子に気づいた発表者がiPadを生徒に貸し出し、翻訳機能を使うよう提案した。生徒は学習をうまく進めることができるようになってきた。他の教科でも使えるようにするため管理職や人権委員会(国際教育)に翻訳機能の使用の提案を行なった。また他の教科を担当する教師に使用の要請を行なった。

【考察】

ミドルリーダーがSSWとCoの教師3名が参加するCo会議を立ち上げ、定期的で開催することで校内にある援助資源を効果的につなげることができたと考えられる。またSSWとCoの教師が協働することで、特定の生徒への三次的援助サービスの実践につながったと考えられる。さらに、それぞれの教師やSSWの強みや役割を活かしながら、校内の他に課題を抱える生徒への二次的援助サービスや、すべての生徒への一次的援助サービスを広げることが非常に重要であると考えられる。